浅井了意の唱導に対する再考察

お茶の水女子大学大学院生
董　航

浅井了意[1]（？～1691）は摂州三嶋江の浄土真宗大谷派本照寺に生を享けた（生年次不詳）が、叔父西川宗治の出奔の咎めに連座して父が寺号廃止・寺地召上の処分を受け寺門追放になったため、幼少の頃流浪生活に入る。浪人時代から、了意は神儒仏三教を学び医学や天文学などを修め、博識強記になった。貧窮辛苦を永くなめた末、出家得度して大谷派に帰参し、紙寺号本性寺を許可された。了意は早くより唱導に素志を抱え真宗僧侶としての自覚を持ち、経典などに注釈をつけ『阿弥陀経鼓吹』、『無量寿経鼓吹』、『観無量寿経鼓吹』という三部経鼓吹をはじめとする仏書、また『堪忍記』、『御伽婢子』、『狗張子』、『浮世物語』などの仮名草子類その他を多数著しており、その著作は都鄙を問わず世間一般に知られ、僧俗の間に広く愛読された。

了意は従来、国文学、特に近世文学史上非常に名声の高い仮名草子の代表的な作者であるにとどまらず、浄土真宗大谷派に僧籍を持つ一仏学者、一唱導者として、仏典注釈や文書説教方面の業績も挙げられる。これまでも、その真宗の僧侶の身分や唱導説教者としての立場については、国文学史上における注目ほどではないにせよ、若干の考察がなされており、ここでは二、三を挙げてみる。まず、唱導説教が了意の生き甲斐であり、優れた説教者になることが彼の究極の目的であったという検討や、その著作、特に仮名草子類を了意の唱導説教者としての立場から本質的に考察されるべきという指摘[2]がある。また、了意は道徳論、特に孝道論から儒教をはじめ神道・道教への接近をはかるとともに、無常観を情感的に展開することで、世俗生活の仏教的再評価を催促し、宗教的次元を維持する姿勢を見せる一方、孝道論を中心とする世俗倫理を説く点であきらかに非親鸞的展開を示しているといった緻密な考察[3]も行われてきた。

このように、了意の浄土真宗僧侶の立場に留意しながら従来から議論が行われているが、近世仏教と近・現代仏教とは無関係ではありえない[4]中、現代に生きる仏教の視点から見れば上述のような「非親鸞的展開」ないし「反親鸞的教説」などの指摘をどう受け止めたらよいのかということは、もう一つの興味深い問題である。本報告では、諸氏の優れた先行研究を参考としながら、近・現代仏教とのつながりから着手し、それと了意の唱導者としての生涯とを照らし合わせることで、了意の宗派や時代を超える唱導説教の特色を示したい。

---

[1] 了意の生い立ちについて、北条秀雄（1972）『改訂増補浅井了意』笠間書院、同氏（1974）『新修浅井了意』笠間書院を参照。
[2] 関山和夫（1973）『説教の歴史的研究』法蔵館、同氏（1989）『庶民仏教文化論：民衆教化の諸相』法蔵館。
[3] 柏原祐泉（1976）「浅井了意の教化思想」笠原一男博士還暦記念会編『日本宗教史論集　下巻』吉川弘文館。
[4] 柏原祐泉「護法思想と庶民教化」柏原祐泉、藤井学校注（1973）『日本思想大系〈57〉近世佛教の思想』岩波書店。